

男女共同参画社会関連意識の分析（2）

— 男女共同参画社会を理解していることについて —

Analysis on Consciousness Related to the Society of Men's and Women's Partnership (2) : Regarding understanding of the Men's and Women's Partnership Society

菱田 陽子

要 約

男女共同参画理解の特徴を明らかにするために、分析を試みた。男性理解群は、少子化の原因は子どもを産まないことに社会が寛容になっているためとし、職場では一部男女平等が実現しているとしている。女性理解群は、「男は仕事、女は家庭」に同意せず、少子化の原因は自分の余暇の充実を目指す傾向であるとし、職場における男性優遇を感じ、指導的役割を果たす女性が少ないのは、世間一般が不快感を示す傾向があること、家族の協力がないためだとしている。男性非理解群は男子の学歴は本人に任せるとし、女性非理解群は、女子に短大・専門学校までを望み、子育ての経済的・精神的負担が少子化をもたらす、女性よりも男性が指導力がある、楽にのんびり暮らしたいとし、多くの質問に「どちらとも言えない」としている。男女とも理解群は、自分の生き方として社会貢献を挙げ、女性の就業のために職場の男女差別是正と、行政決定事項に女性の参画促進を望んでいる。理解しているとする者（理解群）は、必ずしもこの社会の実現への理解を示してはいないが、考え判断していると思われる。非理解群は考えていない。男女共同参画社会実現の推進には、男女共に変えにくい意識の変容をはかると共に、若者には次世代に対する責任を含む社会性の習得が必要と考える。

はじめに

先に筆者は、白山市で実施した男女共同参画に関する市民の意識調査について、その傾向を性別、居住地域、年代、家族形態等によってどのように異なるかを明らかにした（菱田、2006）。これにより、男女共同参画に関する市民の認識の実態を明らかにすることが出来たが、一方では男女共同参画には多様性があり、具体的にどのような考え方・取り組み方が男女共同参画推進への方向であるのか等については、当然のことながら簡単ではなく、極めて多様な側面について分析し、認識を深めていく必要性を有していることも窺える。男女共同参画社会の実現のためには、言うまでもなくこの理解とそのための啓蒙活動も必要である。

本調査では、男女共同参画についてどれほど理解していると認識しているかを尋ねているが、その「男女共同参画を理解している」ことが具体的にどのようなことを意味しているかについて、こ

菱田陽子

の調査の回答傾向を分析することによって、考察する必要があると考える。男女共同参画なるものの定義が必ずしも明確でないこともあり、またこれが自己評価であることから、その回答傾向から見た特徴はかなり多様であると予測される。

男女共同参画社会の実現に関わる男女平等の是非が議論されることが多いが、男女共同参画における「男女の平等」は「男女同じ」を意味するのではなく、性別を越えて、人はひとり一人違うということを基本として考える必要があるであろう。ひとり一人の個人の望ましい、その人らしい生き方と、それぞれの社会との関わり方を考慮する方向から平等を推進しない限り、男女平等の課題は、いつまでも平行線をたどるのでないだろうか。男女平等を一つの形に収めることなく、個人の違いを基盤として、男女平等意識を培い、男女共同参画社会の実現を目指すことが、安定し、継続する男女共同参画社会の実現を可能にすると思われる。このような問題意識も加味して本分析を試みようとしている。

男女共同参画社会の実現を推進することによって解決されるべき課題のひとつに少子化傾向が挙げられるが、少子化傾向には、若者の結婚観、子育て観が関連するとも思われる。近年、結婚しない若者の増加傾向が言われているが（内閣府、2005）、少子化の要因は実際に直面している問題によるもの、例えば住宅事情などもあるが、まだ、直面していないイメージでの問題点とも考えられる。産んでからではなく、産む前に経済的負担や心身の不安、自分の時間がなくなる、等のマイナスの予測によって産むことを躊躇する産む世代の若者が増えているのではないだろうか。現代の若者にとって、自分たちの守るべき生活の基盤が経済的豊かさであったり、自分の余暇の充実であるかぎり、結婚しても子どもを持つ優先順序は、後回しにされる。現在子育てを終わった年代では、結婚したら子どもをもつのが当たり前であり、子育ての苦労も当然という概念が一般的であったように思われるが、この概念は、結婚を望まない若者には通用しないのではないだろうか。子どもを持って初めて味わう喜びと充実感は、彼らの子育ての予測には含まれていないか、あるいは、経済的・時間的ゆとりが保証されなければ、考えることができないことも推測される。子育ての意味を学習していないことは、前の世代の責任とも考えられが、今後の少子化対策として、単に、物質的、物理的条件を整えることを考えるばかりではなく、どんなに貧しくとも子育て、子どものいる家庭の温かさ、充実感、幸福感を想像できる教育の必要性が早急の課題であるとも考えられる。男女共同参画に関する理解群と非理解群が少子化の原因をどのように考えているかという視点からも分析結果の考察を試みたい。

目 的

本調査での男女共同参画社会をどの程度理解しているかを尋ねる質問においては、回答者が主観的に認識している程度を答えている。質問紙調査法においては、常に回答者の回答における様々な歪みが混入する可能性を含んでおり、この回答者の主観的「理解程度」についても同種の可能性が含まれていると考えられる。それを含めて、各回答者の、自分が男女共同参画社会について理解していると答えていることが、どのような特徴を持っているかについて、この調査の他の質問項目への回答傾向を手がかりに明らかにしたい。

具体的には、男女協同参画を「理解している」群と「理解していない」群について、他の回答傾向の相違を明らかにする。

方 法

調査対象及び手続き 20歳以上の白山市民4,000人に質問紙を郵送し、1,666人(男性691名、女性975名)より回答を得た(回収率41.7%)。

調査時期 平成17年10月27日～11月21日

調査内容 調査に使用した質問紙は以下の内容からなっている。

フェイスシート：性別、年代、未婚・既婚、家族構成、仕事、居住地域

I 男女の地位の平等：①「男女共同参画社会」の理解度 ②男女の地位の平等

II 家庭生活：①「男は仕事、女は家庭」という考え方 ②女性の能力開発 ③家庭の仕事の役割 ④少子化の原因 ⑤女性の就業と少子化 ⑧子どもの教育方針 ⑨子どもの進学 ⑩受けたい介護

III 職業：①職場での男女平等 ②女性の就業継続に必要なこと

IV 社会的な活動：①社会的な活動への参加の現況と今後の活動意向 ②社会的な活動に参加していない理由 ③指導的立場の女性が少ない理由 ④老後の生き方

V 女性の人権：①女性の人権が尊重されていないと感じること ②性犯罪をなくすために

VI 男女共同参画社会の実現に向けて：①男女共同参画社会の実現のために必要なこと ②男女共同参画社会の実現のために行政に望むこと ③男女共同参画についての意見等。

結果と考察

1 理解群と非理解群の構成

この調査の協力者を、男女共同参画社会について理解しているとする「理解群」と、これについて必ずしも理解していない「非理解群」とに構成する。具体的には、この調査の「問1 ご自分で『男女共同参画社会』のことを、どれほど理解していると思いますか。」における、選択肢①「よく理解している」、②「少し理解している」、③「あまり理解していない」、④「まったく理解していない」、⑤「その他」、に対する分布をもとに、①または②を選択した者を「理解群」、③または④を選択した者を「非理解群」とした。これら2群について、その回答傾向を比較することによって、「理解する」ことの特徴を明らかにしようとする。

ただし、ここでの調査対象の年齢構成、性別等が、これら2群の比較を歪ませる可能性がある。例えば、理解群に高齢者が多い等の偏りがあれば、理解群と非理解群の比較に年代の要因が混入し、理解群の特徴であるのか、高齢者の特徴であるのか、分からない。そこで本分析のために、男女各群について、年齢により20～30歳代、40～50歳代、60歳以上の3群を考え、理解群と非理解群での年代構成がほぼ同じになるよう、同様な理由から、理解群と非理解群の人数もほぼ同数となるよう、無作為に分析対象群を構成した。実際の分析対象とした標本の年代別、居住地域別の男女別の構成は表1-1及び1-2の通りであるが、年代及び居住地域による偏りの影響はないものと考えた。

ここで回答されている内容については、男女間で相違することが当然予想され、男女で回答内容の質が異なると考えられるので、男女を込みにした比較は行わないことにする。

以下、内容別に理解群と非理解群を比較した結果を示す。分析は、これら2群のうち、それぞれ

菱田陽子

表1-1 分析対象の年代 (単位:人)

	男		女	
	理解群	非理解群	理解群	非理解群
20、30代	40	41	59	56
40、50代	113	113	149	154
60代以上	69	73	143	145
計	222	228	351	355

表1-2 分析対象の居住地域 (単位:人)

	男		女	
	理解群	非理解群	理解群	非理解群
松任地域	127	136	207	198
美川地域	29	41	47	44
鶴来地域	48	33	70	75
白山麓地域	18	18	26	37
計	222	228	350	354

の選択肢等を選択した人数をその群の中に占めるパーセントで示すためのクロス集計を行っており、この分布の偏りの有意性を、全体の分布についての χ^2 検定及びその残差によって判断している。以下のこのクロス集計表をもとに、それぞれ該当の割合(%)を示しているが、表中の太字の数字は、残差による検定の結果5%水準で有意差の認められたものを示している。

2 男女平等について

さまざまな場面で男女の地位は平等になっているか否かについては、例えば、家庭の中における男女平等について、男性のみについて差が認められ、理解群は非理解群に比較して、女性が優遇されているとし、どちらともいえないとする者が少ない。勿論、理解群・非理解群に拘わらず、男性に比較して女性の場合は、男性が優遇されているとする者が多く、平等であるとする者が少ない傾向があるが、これらの男女差については、本稿の目的ではないので、以下の分析に於いても特に必要な場合を除いて触れないことにする。

表2 さまざまな場面での男女平等について (理解群と非理解群の比較、単位:%)

		家 庭		職 場		地域活動		学校教育		政 治		法律・制度		社会全体	
		理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解
男	男性が優遇	47	45	56	51	42	30	9	7	54	54	27	22	58	45
	平等	34	32	23	22	29	35	54	49	24	17	44	38	15	21
	女性が優遇	10	5	9	8	7	9	7	7	4	2	10	8	6	5
	どちらともいえない	9	16	9	13	17	16	10	10	10	15	12	18	18	22
	わからない	0	3	4	6	5	10	20	27	8	12	8	14	3	8
女	男性が優遇	65	63	62	61	50	49	15	14	62	60	31	39	59	61
	平等	17	16	16	9	22	17	46	39	17	11	32	23	10	6
	女性が優遇	5	3	2	2	3	3	4	2	2	0	4	2	3	2
	どちらともいえない	13	16	7	11	18	20	15	17	12	12	18	14	21	19
	わからない	1	2	13	17	7	12	20	28	8	17	15	23	6	12

その他、男女の地位の平等について、両群間で相違の認められたものは、男性では、家庭の中で女性が優遇、地域活動の中及び社会全体で男性が優遇とする者が理解群に多く、家庭では「どちらとも言えない」が、他の2つについては「わからない」とする者が、非理解群に多く認められた。

他方女性では、職場の中、学校教育の中、法律・制度の上で、「平等である」とする者が理解群に多く、これらと地域活動、社会全体については、非理解群の方が「どちらとも言えない」、「分からない」とする者が多い。

男女共同参画社会関連意識の分析(2)

他の項目でも認められるが、理解群は何らかの判断をするが、非理解群は迷い判断できない傾向が認められる。

男性について、有意な差がみられる項目が少ないのは、理解群も非理解群もおおまかには、様々な場面において、男性優遇と感じていることが窺われる。違いがみられた項目のうち、地域活動、社会全体については、理解群が男性優遇としていることから、理解群のこれらの場における男女の不平等を認識していることが窺われる。家庭においては、理解群に女性優遇とする者がより多く、どちらともいえない、とする者が非理解群に多いことについては、家庭の場面と他の項目の場面との質の違いによるのではないかと推測される。家庭は、女性の考え方で運営される女性の場であることが多く、女性のペースが守られやすい女性優先の場であると考え、このように考える理解群の男性が多いことによると考えられる。非理解群は、理解群のように分析し考えることなく、なんとなく「どちらともいえない」を選んでいるのではないだろうか。

女性に関しては、これらの様々な場面の項目に関し、非理解群の女性は現実生活の場面で思考するが、非現実的な場面では考えにくい傾向にあり、現実的に女性のいると思われる「家庭」と「職場」以外の場面では、非理解群の「わからない」が有意に多く現れているとも思われる。

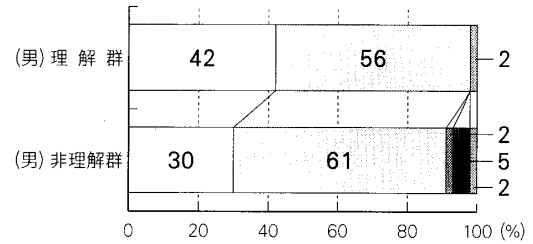
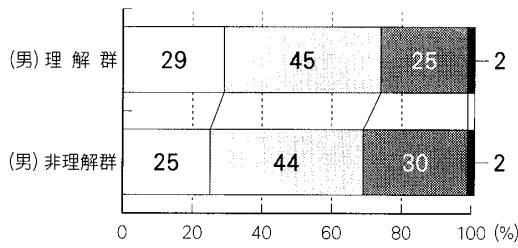
非理解群に比べ、考え、判断する傾向にあると思われる女性の理解群の特徴は、「職場」、「学校教育」、「法律・制度」では、平等と考えており、「地域活動」、「政治」、「社会全体」も有意にはならなかったがそれなりに非理解群と差がある。これにより、多くの場について非理解群より平等と考えている傾向にあり、「どちらともいえない」、「わからない」としている者は、非理解群より少ない。平等と考えているこれらの場は、もともと男女平等であるという概念から作られたり、運営されている場であり、平等と判断しているのであろう。他方、非理解群は、「法律・制度」のみ理解群に比べ、男性が優遇と思っているが、「わからない」と思っている者も理解群より有意に多く、法律・制度を作る議員なども男性が多いことなどから、現実には、男性優遇の傾向で作られていると思ったり、「わからない」と思ったりしているのではないだろうか。

3 家庭生活等について

「男は仕事、女は家庭」という考え方に対する受け止め方について、男性の場合は、両群間に相違は認められないが、女性では、理解群の方がこれを否定する者が多く「どちらともいえない」とする者が少ない傾向が認められる(図1)。参画意識を理解している女性が、この考え方を肯定していない。この結果より、女性の理解群は、旧性役割観を肯定することなく女性も男性と同じように外で働くことを当然と考えていることが明らかとなり、分かり易い結果を示している。男性で、理解群、非理解群に差がないのは、このことに関して、深く考えることなく、明確な意識をもっていないことも想像される。

また、「女性が能力開発のためにいろいろなことを学んだり、社会参加すること」についてどう考えるかについては、男性も女性も理解群の方が「積極的にした方がよい」としており、「家事や育児に影響しない範囲ならよい」については、両群間に差はない(図2)。「家事や育児に影響しない範囲ならよい」について、理解群が非理解群に比較して少ないのではないかと想像したが、実際には有意な差がなかった。男女共に、理解群は、非理解群に比較して、女性の能力開発に積極的な

菱田陽子



□ そう思う □ そう思わない
■ どちらともいえない ■ その他

□ 積極的にした方がよい □ 家事や育児に影響しない範囲ならよい ■ あまりしない方がよい
■ 分からない ■ その他

図1 「男は仕事、女は家庭」について

図2 女性の能力開発について

表3 家事の分担について（理解群と非理解群の比較、単位：％）

		家計管理		食事のしたく		食事の後片付け		洗濯		掃除	
		理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解
男	夫の役割	10	7	0	0	1	3	1	0	2	2
	夫婦同じ	36	30	15	8	21	17	15	14	35	24
	妻の役割	46	58	74	83	58	58	70	71	42	55
	家族で分担	7	4	10	6	19	21	13	12	20	18
	その他	1	2	1	3	1	1	1	3	1	2
女	夫の役割	4	7	0	0	2	2	0	1	1	1
	夫婦同じ	41	31	12	6	16	13	13	7	20	18
	妻の役割	47	54	70	78	48	56	66	76	47	54
	家族で分担	7	7	17	15	34	27	20	13	32	24
	その他	1	2	1	1	1	1	1	3	1	3
		ごみ出し		日常の買い物		介護や看病		子育て		PTA地域活動	
		理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解
男	夫の役割	15	25	1	1	1	1	1	1	9	13
	夫婦同じ	40	23	31	26	40	31	49	40	56	46
	妻の役割	26	30	57	61	27	33	35	42	19	22
	家族で分担	17	20	10	10	25	27	12	13	13	12
	その他	1	2	2	2	7	8	3	4	4	8
女	夫の役割	15	18	1	1	0	1	0	0	7	10
	夫婦同じ	27	22	24	17	28	28	56	50	65	54
	妻の役割	29	36	58	67	27	31	26	32	12	20
	家族で分担	28	21	17	13	41	33	17	14	13	12
	その他	1	3	1	2	3	6	2	3	3	4

男女共同参画社会関連意識の分析 (2)

意識をもっているにもかかわらず実際の家事や育児に対する意識では、非理解群と変わらないことが示され、男女共に、理解群ですら、家事や育児に無理のないところで、女性の能力開発を考えていることが明らかとなった。理解群であっても、女性自身が家事や育児を女性の仕事と考えていることが示され、女性の能力開発の在り方が今後の検討課題であると思われる。家事は、男性の意識の高まりにより、男女共同参画社会の実現により貢献すると思われるが、育児に関しては、単純に男性のサポート意識のみが高まればよいとは思われない面もあり、女性の育児に必要な能力、時間を妨げない形で女性の能力を開発する形が望まれる。

次に、ここで取り上げられた家庭の仕事について、それが誰の役割であると考えているかについては、男性と女性とでは傾向が異なる。

男性では、日常の家計管理、食事のしたく、掃除について、理解群に比較して非理解群が「妻の役割」とする者が多く、その一方で、食事のしたく、掃除、ごみ出し、PTA等地域活動について「夫婦同じ」とする者が理解群の方に多い。また、ごみ出しについて、「夫の役割」とする者が非理解群の方に多い傾向が見える。

他方女性は、食事のしたく、食事の後片付け、洗濯、掃除、ごみ出し、日常の買い物、PTA等地域活動を「妻の役割」とする者が非理解群に多い傾向があり、家計管理、食事のしたく、洗濯、日常の買い物、PTA等地域活動を「夫婦同じ」役割であるとする者が理解群に多い。そして、洗濯、掃除、ごみ出し、介護や看病を「家族で分担」とする者が理解群に多い。

家事全般について、男性も女性も、妻の役割とする者がかなり多い傾向にある。女性では、「妻の役割」とするものについて、両群の差が認められたものが男性よりも多い。男性も女性も、理解群の方がその割合は総体的に少ない。これらの結果より、理解群の特徴がより明確であると思われる。

男女共同参画社会の実現の方向性から考えた場合、妻の役割に関する意識が気になるところであるが、男女の理解群と非理解群で有意差が認められた3項目、「家計管理」、「食事のしたく」、「掃除」、と、女性のみの理解群と非理解群で有意差が認められた4項目、「食事の後片付け」、「洗濯」、「日常の買い物」、「PTA地域活動」全て、理解群のほうが非理解群に比較して、パーセンテージが小さい。つまり、これらの項目に関して、理解群のほうが、「妻の役割」とは思っていないことが認められ、理解群の家事分担意識は非理解群よりやや高いことが伺われる。但し、男性の理解群に関しては、有意差のある項目は、今述べた3項目のみであり、残りの項目も理解群のほうが、非理解群より、パーセンテージが小さいものの理解群と非理解群の有意差は認められない。これらより、男性の場合、家事分担に関する役割分担意識は、理解群が高いとは必ずしも言えない結果とも考えられる。「ごみ出し」を夫の役割とする割合が男性非理解群に多いことも理解群の参画意識が必ずしも高くないことを示している。但し、「ごみ出し」は家事の中でも他の項目と意識の持ち方が違う家事内容とも考えられる。男性理解群は、夫婦同じ役割、女性理解群は家族で分担とも考えており、負担の軽い、誰でもできる家事であることもこの結果に関連しているかもしれない。女性に関しては、10項目中7項目、理解群と非理解群の差が有意であり、全て、理解群の方がパーセンテージが小さいことから、女性の理解群に関する、家事分担意識は概ね非理解群より高いことが伺われる。理解群の方がパーセンテージが小さい数字であるが有意差のない項目は、「家計管理」、

菱田 陽子

「介護や看病」、「子育て」、であり、これらの項目は、参画意識の推進から考えても、男性役割、女性役割に分けて考えにくいこともあり、有意差がでなかったことも理解しやすい。

夫の役割とする家事分担の割合は「ごみ出し」、「家計の管理」、「PTA地域活動」が多少パーセンテージが高いものの、極端にパーセンテージは低い。男女を問わず、理解群、非理解群を問わず、男性の家事分担はとても低いことが明らかになった。

家事分担に関する妻の役割に関しては、男性より、女性の非理解群の意識が課題であると思われる。男性に関しては、理解群、非理解群の妻の役割に関する意識の差では、「食事のしたく」が気になる程度であり、7項目に有意差がないことから個人の意識の違いのようでもある。女性は、殆どの項目で非理解群が妻の役割と思っている割合が理解群より有意に高い。女性自身の家事分担に関わる意識を変えなければ、男性の家事分担の割合を高めることは難しいのではないだろうか。菱田（2006）でも述べたが、女性の意識の中に男性に分担して欲しいとは思わない項目がかなりあるように感じられる。家事は女の領域であり、台所に男性には入って欲しくない、自分の下着は男性に洗って欲しくない、食事の仕度も男性に栄養バランス、素材の扱い方など任せる気がしないなど、家事にたけた女性であればあるほど家事は女性が分担したほうがはるかに優れているという意識は、簡単には、変えられないのではないだろうか。

4 少子化傾向について

近年の少子化傾向の原因については、男性では理解群の方が「子どもを持たないことについて、社会が寛容になってきた」ことを挙げ、女性では、非理解群が「子育てに関する経済的負担・精神的負担」を挙げ、他方理解群が「子供より自分の余暇を充実させたい人が増えた」としている（表4-1）。男性と女性とでは、子育てに対する受け止め方がかなり相違している状況も窺える。

少子化についての「女性が就業していることが、結果として少子化を招いている。」との意見に対する受け止め方については、両群間に意味のある差が認められない。

表4-1 少子化の原因と考えられること（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
子育てにかかる経済的負担が大きい	56	62	52	60
子育てにかかる心身の負担が大きい	14	16	7	12
住宅が狭い	0	1	0	1
子供より自分の余暇を充実させたい人が増えた	27	26	29	22
仕事と育児の両立がむずかしい	29	28	33	31
少人数の子どもに十分手をかけて育てるため	6	7	9	6
配偶者の家事や育児に対する協力が得られない	3	4	4	5
子どもを持たないことについて、社会が寛容になってきた	12	6	6	6
女性の晩婚化・未婚化による	41	38	51	47

5 子どもの育ち方について

自分の子どもについて、どのように育てたいか（育てて欲しかったか）に関し、男性の場合は、全く差が認められない。他方、女性については、理解群が、活発で行動力があり、決断力や指導力

男女共同参画社会関連意識の分析(2)

のある女子を望ましいと考え、他方非理解群は、職業能力のある男子、思いやりのある女子を望ましいと考えているようだ。全体的にさほど明確な相違は認められない。

男性は、理解群も非理解群も男の子は、活発で行動力がある、責任感の強い、思いやりのある子ども、女の子には、思いやりがあって、気配りが出来、家庭を大切にする子に育てたいと思っている。多少、旧性役割観を感ずる結果ではあり、男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしい育ちを願っている様子が窺われる。

女性は、理解群の特徴が現れているように思われる。女の子も仕事をする場合を想定すれば、活発で行動力があり、決断力、指導力も求めたい。旧性役割観では、女の子に対して考えにくかった項目であるが、男女共に働く職場では、必要な資質であると思われる。他方、女性の非理解群は、男子に職業能力を望み、女子に思いやりを望んでいる点で、旧性役割観に基づく育ちを望んでいることが窺われ、分かりやすい結果が示された。

子どもに受けさせたいと思っている教育水準については、それぞれ同性の子どもについて一部差が見られるが自分とは異なる性の子どもについての回答に差がない。

男性の理解群は、男子に大学院まで、女性の理解群は女子に大学までを望ましいとしており、男性の非理解群は本人の意志に任せるのが良いとし、女性の非理解群は短期大学・専門学校までで良いとしている。

男性の非理解群が本人の意志に任せるのが良いとしていることについて、本人の意志の尊重とも解釈されるが、非理解群は、あまり考えないし、判断にも曖昧性があることから、子どもの教育水準について、あまり考えずに、放任しているとも受け止められる。女性の理解群と非理解群の差については、理解群であっても大学院のレベルでは、非理解群と差がなく、大学のレベルで差がみられる。理解群のほうが非理解群に比べ、高い教育を望むのは、男女平等意識が非理解群に比べ高いことを示すと同時に、働く場に於いて、大学程度の学歴が望まれる場も多いと考えていることも推

表4-2 女性の就業は、結果として少子化を招いているか(単位：%)

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
大いにそう思う	17	13	16	14
そうかもしれない	47	48	48	54
そうは思わない	35	34	34	28
わからない	1	5	2	3

表5-1 どのような子どもに育てたいか(単位：%)

		男		女				男		女	
		理解	非理解	理解	非理解			理解	非理解	理解	非理解
男 子	活発で行動力がある子	59	58	51	47	女 子	活発で行動力がある子	17	17	18	12
	思いやりのある子	47	43	47	46		思いやりのある子	83	85	81	90
	責任感の強い子	55	57	54	51		責任感の強い子	17	15	19	14
	気配りができる子	14	15	11	11		気配りができる子	52	51	50	53
	協調性のある子	24	18	19	23		協調性のある子	24	22	22	22
	自立心の旺盛な子	15	21	27	27		自立心の旺盛な子	8	11	13	9
	家庭を大切にする子	21	21	22	21		家庭を大切にする子	51	47	38	40
	職業能力のある子	18	16	17	23		職業能力のある子	6	3	8	7
	決断力や指導力のある子	29	29	27	25		決断力や指導力のある子	4	4	6	2
	誰にでも好かれる子	11	17	17	16		誰にでも好かれる子	34	39	39	40

菱田陽子

表5-2 子どもにどの程度の教育を受けさせたいか (単位: %)

		男		女				男		女	
		理解	非理解	理解	非理解			理解	非理解	理解	非理解
男子	高等学校	4	4	3	3	女子	高等学校	6	9	8	5
	短期大学・専門学校	3	2	3	3		短期大学・専門学校	23	22	16	24
	大学	57	52	50	54		大学	30	24	29	22
	大学院	7	2	6	3		大学院	2	0	2	1
	本人の意志	28	39	38	37		本人の意志	37	45	45	48
	その他	1	0	1	0		その他	0	0	0	0

測される。女性のほうは教育水準が低くてもよい、という旧来の習慣的な考え方の明らかな根拠は曖昧であり、教育に関しては、男女平等が当然とも思われるが、男性も女性も理解群、非理解群共に、女子より男子に高い水準を望んでいる。国の施策の中で、女性の科学者が少ないなど課題とされているが、旧来の習慣的な教育水準の男女格差がある限り、この課題の解決は難しいと思われる。

6 職業について

職場でのそれぞれの面で男女平等になっているかについては、男女間でかなり傾向が異なっており、男性の理解群が、募集・採用条件と賃金について、男性が優遇されているとする者が少なく、平等であるとする者が多い。また、人事配置では、女性が優遇とする者が多い。女性の理解群は、人事配置と全体的に見たもので、男性が優遇されているとしている。また、女性の非理解群は、教育研修制度、賃金、仕事の内容及び全体的に見て「どちらともいえない」としている者が多く、明確な判断が難しい状況であることを窺わせる。

表6 職場ではどの程度男女平等が実現されているか (理解群と非理解群の比較、単位: %)

		募集採用条件		昇進・昇格		人事配置		教育研修制度		賃金		仕事の内容		全体的に	
		理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解	理解	非理解
男	男性が優遇	32	50	58	62	47	50	25	30	43	54	34	34	45	52
	平等である	50	35	31	23	31	29	57	53	45	32	32	33	32	27
	女性が優遇	4	3	1	0	6	2	1	1	1	1	19	13	6	5
	どちらともいえない	14	12	11	15	16	19	17	16	11	13	15	20	17	16
女	男性が優遇	31	31	60	52	50	38	28	24	56	50	30	22	46	35
	平等である	41	38	23	21	28	30	56	47	30	29	41	38	34	33
	女性が優遇	8	13	1	3	1	5	1	1	1	0	9	7	2	3
	どちらともいえない	20	18	16	24	20	27	16	27	13	21	21	34	19	28

男女共同参画意識の推進に関して、男女平等を推進することであると単純に捉え、議論になることも多いと聞かすが、場面によっては必ずしも平等であれば男女共同参画であるといえないものもある。ただし、職場では男、女という偏見に囚われることなく、平等に能力が評価され、人事、賃金などについて格差なく扱われるべきであると考えますが、この調査結果から、女性の非理解群にどちらともいえないと明確な判断のできない者の多いことが示された。職場の男女平等は、男女共同参画意識の推進、男女共同参画社会の実現にとって重要な課題のひとつであると考えられることもあり、女性自身が明確に判断できるための意識の啓蒙が必要と思われる。デパートなど女性の多い職

男女共同参画社会関連意識の分析 (2)

場では、女性の割合が多く、女性の管理職も進んでいると推測されるが、男性も女性も女性優遇と感じている割合は、とても小さい。人事配置のみ男性の理解群が非理解群より女性が優遇とする者が多い。女性の家庭の事情を考慮し、転勤が少ないなどが、この具体例かとも思われる。

女性が働きつづけるために今後どのようなことが必要だと思うかについては、男女とも理解群が「職場における男女差別の是正」を挙げており、女性の非理解群が「育児などによる退職者の再雇用制度の普及」を挙げている。

表7 女性が働き続けるための条件（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
男女とも育児・介護休業制度を取得しやすくする環境づくり	72	68	68	73
保育施設や保育時間の延長など保育サービスの充実	56	58	49	47
ホームヘルパー制度など福祉サービスの充実	16	17	25	21
能力向上のための教育訓練機会の充実	7	9	9	8
相談窓口（セクハラ・メンタルヘルスなど）の設置	4	5	3	4
職場における男女差別の是正	24	17	23	16
育児などによる退職者の再雇用制度の普及	50	48	52	60
在宅勤務やフレックスタイムの導入	32	31	29	28
労働時間の短縮	21	25	25	28

男女とも男女共同参画について考えている、もしくは気にしていると考えられる理解群が「職場における男女差別の是正」が、女性の働き続けるために必要であるとしている点からも職場の男女格差を解決することの必要性と共に、その困難さが推測される。この結果から、男女の平等ということについて、ただ同じであることを意味するのではなく、職場の個人対応に対する意識の啓蒙を図ることの重要性について注目していきたい。

7 社会的な活動について

仕事以外で団体やグループ等の活動をしているかについては、女性の理解群が地元の町内会活動をしている程度で、目立った相違はないが、男女とも「特になし」者が非理解群に多いのが目立つ。

表8-1 仕事以外でやっている活動（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
地元の町内会活動（老人会や婦人会を含む）	57	52	49	40
P T A ・ 青少年 ・ 子ども会活動	14	11	16	15
消費生活団体、消費生活グループ活動	0	1	2	2
ボランティア活動	17	13	23	19
趣味や教養、スポーツ等のグループ活動	43	36	44	39
国際交流活動（通訳やホームステイ受入など）	3	1	3	1
特になし	17	26	16	28

菱田 陽子

表8-2 仕事以外で将来やりたいこと（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
地域の町内会活動（老人会や婦人会を含む）	18	20	18	10
P T A・青少年・子ども会活動	11	8	6	4
消費生活団体、消費生活グループ活動	8	4	9	7
ボランティア活動	37	30	37	34
趣味や教養、スポーツ等のグループ活動	48	52	57	54
国際交流活動（通訳やホームステイ受入など）	23	6	13	8
特になし	21	25	13	21

表8-3 仕事以外の活動に参加しない理由（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
仕事が忙しく、時間がない	77	58	46	33
家事・育児・介護が忙しく、時間がない	17	5	21	21
やりたい活動をしている団体やグループがない	17	10	21	16
家族の協力や理解が得られない	0	0	3	3
人間関係がわずらわしい	17	28	21	16
どのように参加したらいいかわからない	13	15	21	22
関心がない	23	25	15	17

また、今後どのようなことをしたいと考えているかについては、女性の理解群では地域の町内会活動、男性の理解群では国際交流活動を挙げる者が多い。他方、女性の非理解群では「特になし」者が多い。

これらの社会的活動に参加していない理由については、両群間に差は認められなかった。

8 女性の指導的役割について

地域における指導的立場の女性がまだ少ない理由と考えられるものとして、男性では差が認められないが、女性では、非理解群に「男性のほうが指導力があるから」とする者が、理解群では「女性が指導的立場になることを世間一般では快く思わないから」、「家族や周囲の協力が得られないから」とする者が多い（表9）。

表9 指導的役割を果たす女性が少ない理由（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
長い間の習慣で男性と決まっているから	62	63	54	54
男性のほうが指導力があるから	23	20	26	33
女性が指導的立場になることを世間一般では快く思わないから	15	15	29	22
女性自身が指導的立場になることに消極的だから	57	51	45	44
家族や周囲の協力が得られないから	24	24	30	23

理解群の女性は、非理解群に比べ、男性のほうが指導力が勝っているとは考えず、女性にも十分指導力はある、と思っている。この意識は、男女共同参画意識として大切な意識と考えられる。非

男女共同参画社会関連意識の分析 (2)

理解群の女性のように、女性自身が女性に指導力がない、と思っていたのでは、その機会が与えられても受けないと思われ、女性の進出は進まない。理解群は、世間一般の思惑や家族の協力不足で女性の指導力が発揮されないと考えている、ということは、それらの阻む理由が取り除かれれば、女性は持っている指導力を十分発揮できると考えている。この女性の指導力に関しては、女性の理解群と非理解群の意識が男女共同参画を推進する意識と、阻む意識に別れており、興味深い結果を示している。男女共同参画意識の推進には、非理解群の女性の啓蒙が必要であろう。

9 生き方について

人口に対する高齢者の比率を表す高齢化率は、国で高くなっていることを考えつつ、自分にとって望ましい生き方がどのようなものであるかについて、男女とも理解群の方が「社会へ貢献するための活動をする」としている一方、女性の非理解群は「楽にのんびり暮らす」としている。

つまり、理解群の男女には、社会に対する意識が開けている社会性の成熟がみられるのに対し、非理解群の女性には社会性の乏しさがみられることが明らかとなり、分かり易い結果を示している。

国の施策の最重要課題である男女共同参画社会の実現には、年をとったらのんびり暮らす、という意識ではなく、元気に生きている限り、社会を意識し、社会への貢献を為していく生き方が望まれていることから、理解群の生き方は、まさに男女共同参画を理解している生き方とも言えるであろう。自分の能力を生かした仕事をつづけることも男女共同参画社会では、意味のある生き方と考えられるが、この分析結果からは、この項目の理解群と非理解群の差はなく、社会貢献に差がみられた。仕事として働き続ける生き方ではなく、社会の為に生きる生き方を理解群が望んでいることが窺われる。

表10 望む生き方（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
自分の能力を生かした仕事をつづける	45	49	35	31
社会へ貢献するための活動をする	31	22	24	16
趣味やサークル活動を楽しむ	52	54	57	57
健康づくりに力を入れる	41	41	46	42
「孫・ひ孫の」育児など、家事の手伝いをして暮らす	19	20	27	31
友人や地域の人と交流する	46	42	58	51
楽にのんびり暮らす	38	41	30	40

10 女性の人権について

女性の人権が尊重されていないと感じるのはどのようなことかについては、あまり目立った傾向は認められないが、女性の理解群で「女性のヌードや媚びたポーズを、内容に関係なく使用した広告、雑誌」とする者が多い。

女性の人権が尊重されていないことが明らかに理解しやすい項目では、理解群と非理解群の差が認められず、「女性のヌードや媚びたポーズを内容に関係なく使用した、広告、雑誌」で、女性の理解群と非理解群に差がみられたことは、この項目に対する感じ方の違いが示されたと思われる。非理解群の女性の中には、女性のヌードや媚びたポーズは、強要される人権損害の場合の他、女性

菱田 陽子

自身の意志で為されることもあると感じている者があることも推測され、女性の人権に対する両群の感じ方の違いが示されている。

性犯罪、売買春、配偶者や恋人から受ける暴力、セクハラ等をなくするために何をすべきかについては、男性の非理解群が「犯罪の取締りを強化する」、理解群が「学校や家庭における男女平等や性についての教育を充実させる」、女性の理解群が「被害女性を支援し、暴力に反対する市民運動を盛り上げる」とする傾向が認められる。

男性の理解群は、教育による、直接的ではなく根源的な解決を考えており、非理解群は、起きている事柄を直接取り締まることを考えている。この二つの対処法の考え方の違いに両群の意識の違いがみられる。女性についても、直接的ではない被害女性への支援と市民による反対運動について、理解群のほうが多くみられたことに特徴がある。男性も女性も、考え、判断すると思われる理解群の対処法に共通する考え方が認められた。

表11 女性の人権が尊重されていないと感じること（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
売買春（援助交際を含む）	38	38	44	41
夫やパートナーからの身体的、精神的な暴力	36	33	32	33
職場や地域におけるセクシュアル・ハラスメント（性的いやがらせ）	41	31	37	37
女性のヌードや媚びたポーズを、内容に関係なく使用した広告、雑誌	35	37	46	36
「未亡人」、「〇〇夫人」のように、女性にだけ用いられることば	15	19	14	17

表12 性犯罪やセクハラ等をなくするための対応（理解群と非理解群の比較、単位：％）

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
法律、制度の制定や見直しを行う	42	43	38	37
犯罪の取締りを強化する	31	40	39	35
被害女性のための相談所や保護施設を整備する	25	23	29	35
学校や家庭における男女平等や性についての教育を充実させる	40	30	29	25
被害女性を支援し、暴力に反対する市民運動を盛り上げる	14	10	11	7
過激な内容の雑誌、ビデオソフト等の販売や貸し出しを制限する	33	34	45	49

11 男女共同参画社会の実現に向けて

男女が互いに人権を尊重し、利益も責任もともに担い、生きやすい社会を実現するためには、何か必要だと思うかについては、両群間に意味のある差は認められない（表13）。

理解群も非理解群も相手の立場の尊重を挙げている数が圧倒的に多く、誰もが回答しやすい解が選ばれている。

男女共同参画社会の実現のため、今後、行政にどのようなことを望むかについては、男女とも理解群の方が「行政の政策や方針決定への女性の参画促進」を挙げ、その他男性の理解群は「男女の均等な雇用機会と待遇の促進」、女性の理解群は「労働時間の短縮、育児休業・介護休業制度等の普及」、「学校での男女平等教育の推進」を挙げている。

表6の職場の募集採用条件における男女平等について、男性の非理解群の男性が「男性優遇」を

男女共同参画社会関連意識の分析 (2)

表13 男女がお互いに生きやすい社会にするために (理解群と非理解群の比較、単位：%)

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
男女がお互いの立場を尊重しあう	65	69	72	67
男女とも、生活的・経済的自立をする	16	15	16	15
自分の行動は自分で決める	5	8	7	8
男性の仕事中心の考え方を改める	17	17	10	14
家事や育児・介護などは男性も積極的に分担する	28	31	46	45
男女とも、地域での活動や社会活動に参加する	7	7	9	11
これまでの慣行や慣習を見直す	28	25	22	22
女性が甘えた意識を改める	23	16	13	11

表14 男女共同参画社会の実現のためにすべきこと (理解群と非理解群の比較、単位：%)

	男		女	
	理解	非理解	理解	非理解
男女の均等な雇用機会と待遇の促進	53	43	53	50
女性の経済的自立支援のための相談窓口の充実	13	13	19	22
安心して働けるよう保育サービスの充実	58	57	56	56
労働時間の短縮、育児休業・介護休業制度等の普及	50	44	56	48
女性の職業意識の確立と能力の開発事業の推進	23	19	18	18
学校での男女平等教育の推進	30	26	28	20
男女共同参画の考え方の広報・啓発活動	25	20	19	17
行政の政策や方針決定への女性の参画促進	23	14	26	16
生涯学習の機会・情報の充実	16	11	23	21
男女の地域活動への積極的参加の支援	27	23	18	16
高齢者・障害者等への福祉サービスの充実	30	36	49	49

挙げており、理解群は「平等」を挙げているが、ここでは、理解群が「男女の均等な雇用機会と待遇の促進」を挙げている。理解群は募集採用条件は平等でも雇用機会は均等ではないと考えている。女性の理解群は、有職女性の直面している問題と思われる、「労働時間の短縮、育児休業・介護休業制度の普及」、根源的な推進のために「学校における教育の推進」、「行政の決定機関への女性の参画」を挙げ、多角的な方向からの男女共同参画社会の実現を考えている。

全体的考察

以上、男女共同参画に関して、理解群と非理解群の特徴を男女別にみてきた。男女共同参画社会の実現に向けて男女共同参画意識を推進する上で、これまで推進を図る事が難しいとされてきた課題である家事分担について、「ごみ出し」、「PTA地域活動」以外の「食事のしたく」、「洗濯」など男性で差がみられず、女性非理解群が妻の役割と考えている多くの項目や「平等意識」に関わる項目、次世代に関わる「少子化」、「子供の受けさせたい教育」、「どんな子供に育てて欲しいか」などの項目では、理解群と非理解群の差が出ないものが多かった。これら男女共同参画意識の推進が難しい側面は、差も出にくく、課題解決の難しさと比例していることが示された。又、理解群と非理解群の差が明らかに示されたのは、女性が働き続けるための条件として男女理解群が挙げた「職場における男女差別の是正」の様な、理解しやすい平等感が関わる、考えやすい内容に限られ、項目数は少なかった。このことから男女共同参画社会の実現に向かう意識の啓蒙は簡単ではなく、

菱田陽子

地域文化、個人差の違いを考慮にいれ、かなり複雑な要素が絡み合っていることを意識する必要のあることが明らかになった。

男女共同参画意識に関わる課題の内、個人の意志で、その意識の変容が望めるという意味で、まず、男女共同参画意識の推進は、「平等意識」と「家事分担」から始めることが肝要であると考えられる。それには、推進を図る行政側のこれらの課題に関する考え方の整理と統合が必要なのではないだろうか。このことも含め、以下、「平等意識」と「家事分担」について考えてみたい。

男女平等についての質問では、調査対象の女性の環境として地域性により旧性役割観の強い所が多いことも想定されることから、どちらともいえない、わからない、と答えている非理解群の者の中には、置かれている環境の中であたりまえとされる平等感に左右され、どうあるのが平等なのか単純に判断しにくい状況も推測される。これらの女性の中には、複雑に考えた結果、わからない、と回答した者もいると思われることもあり、環境による平等感の違いなどを考慮しつつ、男女平等意識の啓蒙を進める必要があろう。

就業についての表6の項目は、表2のさまざまな場面での男女平等についてのの中の、職場の平等感について、その内容を子細にみたものである。表2では、男性の平等感に理解群と非理解群の差はなく、女性は、理解群が「平等」、非理解群が「どちらともいえない」、としている。但し、表6の各項目別にみると、女性の理解群は、「人事配置」と「全体」として、男性優遇と考えており、非理解群は、多くの項目で「どちらともいえない」と、判断できない結果を示した。平等であることを望みたい職場について、女性のほうが理解群と非理解群の感じ方に違いを示している。このことは、女性の働き方の複雑性があるのかもしれない。

職場の男女平等に関して、男女雇用機会均等法が実施され、総合職、一般職による職の分類をし、男女に関わらずどちらでも選べる状況を推進したものの、その後の問題点も多く、男女を同じに扱うことが必ずしも平等ではないのではないかと考えられ、職場の男女平等の推進は単純ではない。基本的には、個々人が平等であると感じる平等感が大切なのであり、男女に関わらず、個人の事情を考慮し、その待遇が満足感のあるものであることが重要なのではないだろうか。このことが推進されれば、女性の理解群の平等感が増し、平等感が理解しやすくなることによって、どちらともいえないとする非理解群の減少も期待できる。

例えばアメリカでは、会社の面接で、まず給料はいくら欲しいのか、と質問され、自分で雇用条件を申し出ることが通常の形であり、個人が自分で働き方を考え、判断し、雇用者側と条件のすり合わせをすることにより、働き手がある程度納得した状況で働き始めることが知られている。

アメリカの雇用の仕方が日本に合うかどうか、必ずしも判断の難しいところであるが、日本では、雇用条件を全て、雇用者側が決定するところが多いことから、個人の条件にあった働きがもたらす平等感が生まれにくく、必要な個人差をつけることができないようにも思われる。アメリカでは、移民も多く多国籍の人々が集まっているため、常識はいくつもあり、スタンダードを決めることは極めて難しい国の事情があるようにも思われるが、個人の価値観が多様化している今日の日本でも、アメリカ型の多様性への対応方法を真似る部分もあってもいいのではないだろうか。

男女共同参画社会の実現には、企業のあり方に負うところが大きいという議論がよくなされるが、企業のあり方も個人のあり方も一様性を追求するのではなく、個々の対応という多様性の追求が重

男女共同参画社会関連意識の分析 (2)

要であると考え。平等意識も個々人に相違があることを認識し、平等は一色ではなく、多様であることを再認識した上で、職場の平等を見直していくところに職場の平等の推進があるのではないだろうか。その意味では、個人と職場のコミュニケーションが重要とも思われる。個人の言い分と職場の言い分のすり合わせを常に図ることをしなければ、職場の活性化、個人のやる気に支えられた、安定した職場は望めないと考える。その意味では、個人と企業の自立した成熟性が育つことにより、非理解群の女性のどちらともいえない、と回答した項目がより明確な平等感に近い回答になるのではないだろうか。

男女共同参画社会を構成する社会としての最も小さな単位は家庭であると考えられる。その家庭における家事分担のあり方は、男女共同参画社会の実現に最も関わるどころと考えられるが、調査結果から、女性に関して、理解群の方が、家事は妻の役割とは考えていないという両群の相違はあるものの、依然として、両群とも妻の役割と考える割合が大きい。菱田（2006）の男女比較でも男女とも、妻の役割とするものに、「食事の仕度」、「洗濯」、「日常の買い物」の占める割合が大きかったが、今回の理解群、非理解群に分けた分析でも、理解群、非理解群、男女を問わず、妻の役割とするものの項目は同じ結果を示している。

この結果から、家事分担意識が進みにくい原因のひとつに、変えにくい女性の家事に関する優位性があると思われる。家事に関して、これまでの日本文化、旧性役割観の関与も大きいと思われ、男性の家事能力を養うとともに、男性の家事参加を恥と思わない意識の養成も重要なのではないだろうか。これらの文化的背景、旧性役割観は地域差、家庭の育ちによる個人差も激しいことが考えられ、推進を阻んでいる現れにくい要因の一つとも考えられる。男性の家事分担が増えることは男女共同参画社会の推進を支える基本と思われる。

本論文では、理解群と非理解群の意識の差による男女共同参画に関わる各項目の違いを見ることを目的としたため、有職女性と専業主婦の家庭における分担状況に対する意識の違いを見ることはしていない。男女共同参画社会の推進にとって、この違いをみることも意味あることと考えられ、今後の課題としたい。

次に、「平等意識」、「家事分担」意外の諸点について、理解群と非理解群の男女共同参画意識を社会性という視点から考えてみたい。

人はひとりで生きているのではないことから、男女共同参画意識に関わる全ての項目を社会との関わりという視点から考察する必要もあるであろう。この視点から、男女共同参画社会の実現に向かう男女共同参画意識は、個人の社会性の成熟度との関わりが大きいことも推測される。社会に生きる個人の意識は自己の充足感のみではなく、社会に対する責任、貢献を考慮した充足感であることが望まれる。ここで尋ねている様々な項目の中の地域に関わるものなどは、男女共同参画に関わる個人の社会性が問われているものとも思われる。この視点から、理解群と非理解群の男女共同参画意識の相違について、全体的に考えてみたい。

男性の理解群が「子どもをもたないことについて」の「社会の寛容性」をあげていることについて、理解群が子どもをもたないことを肯定しているかいないかはこの結果からは判断できないが、男女共同参画を考え、判断する能力を有する男性が少子化の原因を、非理解群に比較して、社会のあり方よると思っていることが明らかになった。確かに社会のこの受け入れが少子化の原因の一

菱田陽子

つと思われるが、社会のこの寛容性が若者の自由な欲求をそのまま許容するものであってはならないであろう。社会に対する責任という視点から考えると、子どもを産むか産まないかは、自由な個人の好みによるものばかりではなく、次世代を造る社会的責任でもある。男性の理解群がこの原因をそのまま肯定することなく、社会的責任もまた考える姿勢をもつ者であることを望みたい。

女性の理解群は、少子化の原因を経済的負担が大きいことによる、とは考えておらず、子どもより自分の余暇を充実させたい、と考えており、非理解群の女性は経済的負担が大きいとともに、心身の負担も大きいことによると考えていることについて、この違いは、経済的ゆとりがあるが時間的なゆとりのない有職女性と、時間的ゆとりはあるが経済的ゆとりは夫の収入による専業主婦の女性の違いの関連も推測され、今後の課題としたい。

国の少子化対策として、産んでも働くことができる制度の確立が挙げられているが、この施策が、理解群の女性が挙げた少子化の原因、子どもより自分の余暇を充実させたいという思いの解決を図るものでなければ少子化の問題は解決しないであろう。子どもを産み、育てることは、家事分担のような物理的な問題ではないだけに、働くことと産み育てることの両立を男女共同参画社会によって可能にしていく方向性をますます探る必要性に迫られている。ど同時に女性の社会に対する産む責任もあり、この社会性の成熟を望みたい。

女性の就業と少子化について、男女とも、理解群、非理解群に有意な差が認められなかったことに関して、菱田（2006）でも述べたが、山口（2005）によれば、「育児休業制度があるなら、有業女性の出生率は専業主婦の女性の出生率と比べても異ならないか、場合によってはむしろ高い」。内閣府の国際比較の調べでも（内閣府2006）「2000年時点では、女性の労働力率が高い国ほど、出生率が高い傾向がみられる」とされている。このような調べからも女性の就労と少子化は結びついていないことがわかっており、今回の分析結果で、答は曖昧であったことも理解できる。

社会的活動について、仕事以外でやっている活動もしくは、仕事以外で将来やりたいことに関して、理解群の女性が「地元の町内活動」を挙げていることについて、家事分担を訊く項目の中の「PTA地域活動」では、男女理解群とも「夫婦同じ」と回答しており、「妻の役割」と回答したのは女性の非理解群に多かったことと合わせて考えてみたい。PTAは、他の地元の活動に比べ、学校教育との関わりがあり、自由参加というよりはやらなくてはいけない仕事のような活動内容であり、異質であると考えられる。このような参加しなくてはいけない役割観のもとでは、理解群は、妻の役割とは思っていないが、自由意志による参加と考えられる地元の町内活動に対しては、ボランティア、貢献度などの意味合いからか、仕事以外でやっている、もしくはやりたい項目として、女性の理解群がこの項目を挙げている。この結果より、理解群の女性は自主的に地域活動をやりたいと思っていることが示された。男女共同参画を考えている女性が、義務感ではなく、地元の町内会活動に参加したり、将来参加したいと思っていることは、男女共同参画社会の実現に大きく貢献することと思われる。

今回の分析で明らかになったことを総括的に考えてみると、例えば、様々な場面での男女平等について訊いている項目の内、有意な相違がみられた項目全てについて、男女共、非理解群に「どちらともいえない」「わからない」とする者が多かった。このことから、全般的に、男性も女性も理解群と非理解群の違いは、男女共同参画について考え、判断しているかどうか、男女共同参画に関

男女共同参画社会関連意識の分析 (2)

する現実を認知しているか、いないかが根底にあると思われる。理解群は、男女共同参画意識が高く、非理解群は、その意識が低いのではないかと、というような単純な相違ではなく、現実の様々な場面における男女の扱われ方の違い、意識の違いを現実に沿って認める傾向にあるのが、理解群であり、あまり考えることなく、曖昧にしているのが、非理解群の特徴と言える。

男女共同参画社会の実現は、今や政治の最重要課題のひとつとして挙げられており、各市町村では、継続的にセミナーや講演会を実施しているが、男性参加の少なさが問題であるとも言われている。本分析により、理解群が男女共同参画社会の実現に向かう理解を示しているわけではないことが明らかとなり、男女共同参画意識の推進は、男女共に変えにくい意識の変容をはかることを望まなければその速度を増すことは難しい。若者には、次世代に対する責任を含む社会性の習得を望むと同時に、非理解群の意識の啓蒙を図り、今後、理解群の数が増し、その意識が、現実認知に留まることなく、男女共同参画意識の推進を推し進める積極的な意識に進み、推進の原動力になることを期待したい

文献

- 菱田陽子 男女共同参画社会関連意識の分析 (1) : 白山市民についての性別、年代、家族形態との関連 北陸学院短期大学紀要38、203-218. 2006年
- 内閣府 『平成17年版 国民生活白書「子育て世代の意識と生活」』 2005年
- 内閣府 『平成18年度版 男女共同参画白書』 2006年
- 内閣府男女共同参画局 『男女共同参画社会の実現を目指して』 2007年
- 山口一男 『少子化の決定要因と具体的対策：有配偶者の場合』 経済産業研究所 政策分析論文 No.6 2005年